

図書案内

2021年 1月号

担当 1-4 細川 1-7 山澤

冬や雪に関する本



1月になり本格的な冬がやってきました。外は寒いので家で過ごす時間も多くなっているのではないのでしょうか。今回は、暖かい家のなかでも寒い季節を味わえるような、冬や雪に関する本を集めてみました。今年の冬は、是非これらの本を読んで過ごしてみたいはいかがでしょうか。図書館にある普段読まない本に挑戦してみるのもいいかもしれませんね。

『急行「北極号」』 C.V.オールズバーグ

主人公の少年は、クリスマス・イブの夜中に汽車が家の前に停まっているのを見た。不思議な汽車は少年をサンタのいる北極点まで連れて行った。道中の様々な雪景色は、読む人の心をわくわくさせる。そしてサンタから一番のプレゼントをもらった少年の様子や、最後の場面は、私たちが成長する中で失くしてしまったものを思い出させてくれるだろう。(山澤)

心から信じていれば、その音はちゃんと聞こえるんだよ。



『ナルニア国物語』 C.S.ルイス

白い魔女によって永遠の冬に閉ざされてしまったナルニア国。人間界からうっかり来てしまった4人のきょうだい胸躍る冒険を繰り広げるファンタジー小説です。ナルニア国は人間の世界とは異なることばかり。腰から上が人間で足はヤギのフーン、小人や精霊たち、そして偉大なライオン・アスランなど魅力的な登場人物が出てきます。4人のきょうだいの成長にも目が離せません。あなたもナルニア国の旅へ出発してはいかがでしょうか。(細川)

気が付くと、なんと、真夜中の森の中につっ立っていて、足もとには雪がつもり、空から雪がふっていたのです。



『極北』 マーセル・セロー

旧大陸が荒廃した世界で、主人公はシベリアの入植地に1人で住んでいる。正しさのコンパスは何の役も果たさない。人々は物を奪い合い、殺し合い続けた。主人公は自殺を図るが、死ぬ直前に見た飛行機に新たな希望を見出した。希望を追いかける旅の行く末は如何に……。荒んだ人々を目の当たりにしてきた主人公の、信仰や人間についての持論には考えさせられる。シベリアの厳しい冬のような冷たさを、この物語からぜひ感じていただきたい。(山澤)

北とはすべての方向であり、どこにもない方向である。



『雪沼とその周辺』 堀江敏幸

都会から離れたところにある雪沼。暮らしている人々の間にはゆったりとした時間が流れています。古いボーリング場やレコード店、コンピューターを使わない昔ながらの仕事方法など、少し時代遅れのこの町で、住人は雪沼に来る前のことや、雪沼で過ごした思い出に浸ります。静かでゆっくりとした町の中で、それでも時間の変化には抗えない不安も心に染みる一冊です。(細川)

たち騒ぐ沈黙のざわめきのなかで身体を凝固させた彼の首筋に、かすかな戦慄が走った。



雪の研究者たち

日本で雪の研究をした人といえば、中谷宇吉郎が有名だ。世界で初めて人工雪の製作に成功し、雪や氷の研究に大きく貢献した。人工雪の装置は、ビーカーの水を温めてできた水蒸気を冷やすことで、上部に吊るしたうさぎの毛に結晶を作るといったものだった。そして観測結果から、気温と水蒸気量の値と結晶の形の関係をまとめた。その図は「中谷ダイヤグラム」と呼ばれている。しかし、実は中谷よりもっと前に雪の観測をした人物がいた。江戸時代後期の下総国古河の城主・土井利位である。土井は雪の結晶の形を記録して「雪華図説」を著した。そのスケッチは図案として民間に広まり、絵画や工芸品などに広く用いられた。雪は幻想的で、人々を魅了する奥深さがあるのだろう。

【出典】日本気象学会 土井利位「雪華図説」の心理学的・科学的考察 内田英治 https://www.metsoc.jp/tenki/pdf/1989/1989_06_0361.pdf
茨城県古河市 HP「雪の殿さま土井利位」 <https://www.city.ibaraki-koga.lg.jp/lifetop/soshiki/rekihaku/tenji/yukitono.html>
中谷宇吉郎 雪の科学館 <https://yukinokagakukan.kagashi-ss.com/>